態度動詞の分類
――補文に対する動詞の分析の提案――

小　野　正　樹

1. 研究目的

ある命題内容を主体がどのように捉え，その命題情報を聞き手に提供する際にどのような態度で伝えるのか，こうした2つのレベルを観察する。前者は文内に現れる主体の認識レベルの問題であり，後者は話し手の態度を発話レベルで見るものである。

（1）　彼女がヴァイオリンを弾くのを見た。
（2）　彼女がヴァイオリンを弾くと見た。

例として，（1）は視覚に基づいて述べられた文であるのに対し，（2）は思考内容を伝えたものである。認識レベルで較べると，（1）は補文内容の表す「彼女がヴァイオリンを弾く」ことを「見る」主体が同時間に経験しているのに対し，（2）では補文内容は未成立なものと捉えている。この結果，聞き手は（1）を事実の報告として聞くが，（2）は意見として理解する。このように認識と発話のレベルを連続して見ることで，知覚・思考・認識・感情などの人間の精神活動の言語化される過程を観察し，日本語研究で感情動詞（寺村1982：139-154），引用動詞（仁田1980：188-192），認識動詞（益岡1987：140-157），思考・感情動詞/伝聞・伝達動詞/判断動詞/報告動詞/思考動詞（森山1988：80，83-84，1992）と研究者によって異なる名称や定義が行われてきた動詞について，『態度動詞』という範疇を設けて，命題内容の捉え方を記述する。先行研究では森山（1992）の文末思考動詞を除けば，名詞句との結びつきを見ているが，本稿では補文を対象として，主文述語の意志形化，否定化，および補文内の述語のアスペクトから，これらの動詞文に表される心的態度を観察するものである。

2. 本研究の意義と範囲

『態度動詞』という名称はバーワイズ/ペリー（1992：185）で「（英語において）埋め込み文を後続させること，および知覚や認知の報告に用いられること」と，形態および機能的に定義しているものに相当する。本研究は話し手と聞き手の相互行為的な語用論の枠組みで考えているが，サール（1986）等で指摘されている発語内行為のような聞き手に対する行為の遂行ではなく，聞き手に対する情報提供機能を持つ文についての観察である。サールが，命令，約束，依頼，質問，報告などの聞き手への行為を発語の力として分析したのに対し，本研究では話し手が表す心的態度をどのように聞き手が判断できるかという聞き手の解釈の可能性を分析する点でサールの研究とは目的を異にする。つまり，話し手の態度を聞き手の能動的行為から分析するもので，換言すれば，発話された内容がどう解釈できるかを探る点に本研究の特徴がある。話し手の伝えたい内容が聞き手に誤解されることがあるが，それは話し手の伝え方に曖昧さがあるために生じるのであり，そこで聞き手の側から話し手の態度[1]を分析することで，情報を伝える側の客観的な記述ができると考えるわけである。

次に，本稿で扱う補文とは，益岡（1997：11-12）で分類されている名詞節（助詞を伴って補足語として働く従属節），および連用節の中の引用節を指す。形態的には補文標識コトおよびノと助詞ヲ・ガ・ニと結びつくもの，あるいは，助詞トと動詞が結びつくものを指す。従来このタイプの構文は，３つの方向性で分析されてきたが（図１），この３方向を『態度』という視点で捉えなおすことも視野に入れている。

彼女がヴァイオリンを弾く	のを	見た。
①補文内容	②補文標識/助詞	③動詞の分類

図１　先行研究の３つのアプローチ

先行研究を概観すると，①補文内容からのアプローチとしては補文内容の情報

1　『態度』という用語は Hirose（1986）で Speaker's Propositinal Attitude として，真偽値と話し手の関係を見ているが，本研究では話し手だけではなく，主体の態度も観察する。

が主観的か客観的かが構文に影響を与えると主張するKuroda（1973），久野（1973），森山（1992），益岡（1997 b），サールに基づいて話し手の思考内容を分析したYokomizo（1998）がある。次に，②補文標識からのアプローチとしては，久野（1973），砂川（1988），藤田（1991）が引用との関係を見ており，また，橋本（1990）益岡（1997 a）では補文標識「ノ」「コト」の成立条件を述べている。この中でも橋本の分析は，本研究の認識レベルとの関わりが深い。③動詞の分類からのアプローチとして，寺村（1982：139–154），仁田（1980：188–192），益岡（1987：140–157），森山（1988：80，83–84）などはいずれも動詞自体の語彙的意味や名詞句との結びつきの分類を目的としたもので，堀川（1991）はアスペクトの観点から動詞の分類を行っているが，補文への言及は見られない。

こうした先行研究のうち，特に形態的分類の③を始め，①および②に欠けている視点は発話者や主体の情報把握，情報内容を聞き手に理解させる機能など語用論的分析がなされてこなかったことである。そのため，表層的な分類には効果を上げたが，情報伝達の機能にまでは十分に踏み込まれていない。それは補文を伴った文単位での分析がなされてこなかったことにも関係があろう。ここで「ヲ聞く」を例として，目的格が補文と名詞句で『態度』が異なることを説明したい。

（3）　（僕は）彼女がヴァイオリンを弾くのを聞いた。
（4）　（僕は）彼女がヴァイオリンを弾くことを聞いた。
（5）　（僕は）彼女の演奏を聞いた。

補文標識「ノ」を持つ（3）では発話者が「彼女がヴァイオリンを弾く」ことを直接体験しているのに対し，「コト」を含む（4）で「僕」が聞いたのは，ヴァイオリンを弾くことについてのニュースであり，「主体の心の外側の世界に関する証拠」としては，「彼女がヴァイオリンを弾く」ことに間接的で，両文には直接体験と間接体験の対立がある。そして，（5）のように名詞句「演奏」を目的格にとる文では，その点は曖昧で両義に解釈でき，補文をとる文の方がより細かな現実描写をしていることがわかる。また，補文標識は補文内容とも関係があり，モダリティ表現を含めるかという点でも異なる振る舞いを見せている。

（6）　＊彼女がヴァイオリンを弾くかもしれないのを聞いた。
（7）　　彼女がヴァイオリンを弾くかもしれないことを聞いた。

ところで，動詞「聞く」は助詞「ト」と共起することもできるが，その場合には（4）と同じく間接的である。

（8）　彼女がヴァイオリンを弾くと聞いた。

助詞「ト」を含んだ場合には，補文標識「コト」の場合と同じく，モダリティを持つ補文を取り込める。

（9）　彼女がヴァイオリンを弾くかもしれないと聞いた。

このように，補文内容，補文標識，そして動詞は態度と関係していることがわかり，これらを統一的視点で捉えようとするのが本研究の目的である。形態的には補文を持ち，情報的には聞き手が話し手の補文内容に対する情報把握および方法や態度を理解できるものを『態度動詞』として分析を進めたい。

3　本研究の考え方と前提

前述したように「聞く」を述語とした文でも，共起する補文標識や助詞によって補文内容の捉え方が異なり，こうした違いを本研究では態度が異なるという。態度については主節動詞のアスペクトとも関わりがある。「聞く」のテイル述語文を観察すると，進行の解釈では一人称の「僕」とは共起しにくく，加えて，（11）のように「聞く」主体と文の発話者が異なる場合には，「聞く」述語文でありながら聴覚を基としたものではない。

（10）　？僕は彼女がヴァイオリンを弾くのを聞いている。
（11）　　彼は彼女がヴァイオリンを弾くのを聞いている。

（11）はこの文の発話者の視覚に基づいた現象描写文であり，実例を見てもテイル形を用いた（12）は作者の視覚に基づいている。

(12) 「どちらの見当です。若しいらっしゃるとすれば」
先生はこの問答をにやにや笑って聞いていた。

夏目漱石『こころ』：165-166

このように同じ述語でも人称やアスペクトによって用法が異なる現象もあるが，そもそも本研究で扱う動詞は，パーマー，F.R.(1972：124-125) が「話者だけが気づいている状態または動作をさす動詞」と定義している「私的」動詞（Private Verbs）に重なっていることからも，本研究でも１人称主体の文が『態度動詞』の基本的用法と考えたい。また，効率的な記述をめざすためには，「聞いた」と「聞いている」で態度が異なれば，一つの動詞についての記述が膨大なものになる可能性がある。よって，それぞれの動詞の用法を記述するのではなく，態度のタイプを示した上で，何がそこに当てはまるかを考えていくのも１つの分析方法と考えるわけである。テイル形の（11）の情報構造は次のように説明したい。

(13) 彼は彼女がヴァイオリンを弾くのを聞いている(のを僕が見ている)。

つまり，「聞いている」述語文は発話者の視覚に基づく「ヲ見る」の用法に転用されたものと考える立場をとる[2]。こうした考えから，一人称主体でタ形述語文を取り上げて分類をはかりたい。

次に分析方法を示すと，本研究に近い補文を含んだ文の構造を補文と引用の場の２つのレベルで説明を図った砂川（1988：14-18）があるが，態度動詞文も２つのレベルで整理がつくだろうか。次の２文を参照されたい。

(14) 僕は彼女がヴァイオリンを弾くのを知った。
(15) 僕は彼女がヴァイオリンを弾くのを知らなかった。

ここで注目したいのは（15）の文が成立する語用論的条件で，（15）が成立するためには（14）を含意していなければならないことがわかる。つまり，補文

2 中右（1994：51）で「発話時点と瞬間同時的に発現する心的態度のうちで，話し手にとって接触可能な情報となりうるのは，ただひとつ，話し手自身の心的態度だけである」という考えは本研究の考え方を援用する。

内容についての情報を所有していなければ発言が成立しないことが（15）の特徴である。そこで，補文内容と発話のレベルの間に認識レベルを積極的に認めて，以下の3段階のレベルを提案する。補文内容の表していることがらを『事態』とし，この『事態』を人間が内的に情報として把握する行為を本研究では『認識』とする。情報把握の方法についてはすでに「ヲ聞く」と「ト聞く」で違いがあることを見たが，こうした主体の情報獲得の方法を『認識の態度』[3]とする。続けて，その『認識の態度』に基づいて述べることを『発話』といい，発話時の話し手の『事態』に対する捉え方や『認識の態度』に対する判断を『発話の態度』とする。このように3つに分けることについて，改めて（15）を用いると，図2のように説明できる[4]。

レベル	内　　容
事態	「彼女がヴァイオリンを弾く」こと
↓	
認識の態度	「彼女がヴァイオリンを弾く」という事態について 「僕」が情報を得ていないこと
↓	
発話の態度	「彼女がヴァイオリンを弾く」という事態の情報を得て， 「僕」が認識の態度を表明すること

図2　「僕は彼女がヴァイオリンを弾くのを知らなかった」の3つのレベル

本研究では情報把握という機能的な面に焦点を当てて，補文内容の表す『事態』に加え，主体として事態を捉えた『認識の態度』と，『認識の態度』を経て，発話時の事態に対する捉え方の『発話の態度』とに分けることを提案する。

次に人間の精神活動はどのように分類できるであろうか。先行研究を見ると，概念的に言語モデルを設定したKusanagi (1971) ではsensationとperception

3　態度という用語を用いる理由は，発話時などのテンスのみを扱うのではなく，誰がどのようにその状況に関与しているかを観察するためである。

4　「↓」は矢印の方向先がより新しい時点を指向していることと，情報内容の変化を示している。この説明を（14）に当てはめても，『認識の態度』と『発話の態度』に違いはないが，分析対象の述語の中で，最も複雑なものをモデル化しておけば，それに比べて単純なものはそこに含まれると考え，敢えて3つのレベルを設定するのである。

に分け，パーマー，F.R.（1972）も感覚（sensations）と精神的活動（mental activities）に区別している。また，具体的に日本語動詞の分類を行った堀川（1991）は「心理動詞」と総称して，アスペクトの観点から知覚・思考・感情に3分類している。しかし，堀川の分類の中で，疑問が二点あり，一点は知覚についてで，もう一点は「知る」ことを精神活動と認めないかという点である。知覚は既に見たように直接体験と間接体験に分けられる。また，「知る」という行為も，話し手の精神活動と認める必要があり，これを認知としたい。そこで，本研究は，事態との関わりから，分析を進める前提として次の5種類の精神活動を考えている。

i　direct-perception（直接知覚）
ii　indirect-perception（間接知覚）
iii　cognition（認知）
iv　thinking（思考）
v　emotion（感情）

この5つのカテゴリーが，発話にいたるまでの過程でどのように『事態』を捉えていくかを分析する。

4　分　析

前節の前提に基づき，直接知覚として「ヲ見る」，間接知覚として「ト聞く」，認知として「ヲ知る」，思考として「ト思う」，感情として「ヲ喜ぶ」をそれぞれの範疇の例として取り上げる。

(16)　彼女がヴァイオリンを弾くのを見た。　（直接知覚）
(17)　彼女がヴァイオリンを弾くと聞いた。　（間接知覚）
(18)　彼女がヴァイオリンを弾くのを知った。（認知）
(19)　彼女がヴァイオリンを弾くと思った。　（思考）
(20)　彼女がヴァイオリンを弾くのを喜んだ。（感情）

4—1　事態と認識について

事態の分類には従来多くの提案がなされてきた。久野（1973）は情報の性質

を具体的内容と抽象的内容に分け，Kuroda（1973），益岡（1991）では情意表出型と演述型に分けているが，本研究では特に後者の分類が重要だと考えている。その理由として，分析の前提として感情を挙げているため，情意という概念に非常に近く，区別する必要があるからである。Kuroda を踏まえた益岡（1991：79-80）を引用する。

> 「演述型」は話し手の知識（広義のもの）を聞き手に情報として提供するという働きを有する。（中略）「情意表出型」は表現時において話し手の内面に存する感情・感覚や意志の内容を情報として聞き手に伝える働きを持つ。

事態を表現する形態としては，名詞文，形容詞文，そして動詞文があり得るが，本分析では，情意表出型として形容詞述語文「彼女がかわいい」を，演述型として動詞述語文「彼女がバイオリンを弾く」を例として，5種類の述語文との関係を見たい。

(16-1) ＊彼女がかわいいのを見た。
(16-2) 彼女がヴァイオリンを弾くのを見た。
(17-1) 彼女がかわいいと聞いた。
(17-2) 彼女がヴァイオリンを弾くと聞いた。
(18-1) ＊彼女がかわいいのを知った。
(18-2) 彼女がヴァイオリンを弾くのを知った。
(19-1) 彼女がかわいいと思った。
(19-2) 彼女がヴァイオリンを弾くと思った。
(20-1) ＊彼女がかわいいのを喜んだ。
(20-2) 彼女がヴァイオリンを弾くのを喜んだ。

このテストから，「ト聞く」「ト思う」が両者を補文として取り込め，そして直接知覚を表す「ヲ見る」は，情意表出型の事態を補文として持つことはできないことがわかる。

次に，事態を能動的にとらえるか，受動的にとらえるかをみよう。この理由は益岡（1987：154）の指摘のように，特定の事態を捉えるには自発的か主体的かの方法があるからである。本稿では，その区別として意志形（yoo 形）が

成立するものを積極的，成立しないものは非積極的とする。積極的という考え方は抽象的だが，意志性があるものは事態に対して働きかけるものと考え，意志性がないものは事態を受動的に受け入れるものと考える。その結果，「ヲ見よう」「ト思おう」は自然だと判断できるが，「ト聞こう」「ヲ知ろう」「ヲ喜ぼう」は不自然である。

(16-3)　彼女がヴァイオリンを弾くのを見よう。
(17-3)　＊彼女がヴァイオリンを弾くと聞こう。
(18-3)　＊彼女がヴァイオリンを弾くのを知ろう。
(19-3)　彼女がヴァイオリンを弾くと思おう。
(20-3)　＊彼女がヴァイオリンを弾くのを喜ぼう。

意志形テストから（16-3）と（19-3）は『事態』に積極的に働きかけていくものだが，（17-3）（18-3）（20-3）は『事態』を意志性をもって捉えるものではない。では，「ヲ見る」「ト思う」の違いはどう示せるのか。すでに「ヲ見る」は情意表出型の事態を持つことができないことを見たが，この他に両文の補文内容のアスペクトを変えて観察したい。

(16-1)　彼女がヴァイオリンを弾くのを見た。
(16-2)　彼女がヴァイオリンを弾いたのを見た。
(19-1)　彼女がヴァイオリンを弾くと思った。
(19-2)　彼女がヴァイオリンを弾いたと思った。

この違いは（16）では補文内容の事態と「ヲ見る」主体の行為に同一性がなければならないと説明できる[5]。その一方，（19）では同一性はあり得ない。それぞれのル形文を観察すると，（16）では「見た」時点で「彼女がヴァイオリンを弾いて」いなければならないが，（19）では「思った」時点でまだ「彼女がヴァイオリンを弾いて」いてはならないからである。このように（16）の「ヲ見る」述語文ではル形・タ形のいずれとも結びつくが，いずれも事態のアスペクトを反映したものとなっている[6]。

次に，意志形をとらない動詞の「ト聞く」はどうだろうか。

(17-1)　彼女がヴァイオリンを弾くと聞いた。

(17-2)　彼女がヴァイオリンを弾いたと聞いた。

「ト聞く」でもル形・タ形と結びつくが，この場合には『事態』と認識に同一性はない。つまり，ル形では『事態』が未完了を表し，「聞いた」時よりも未来においてヴァイオリンを弾くからで，また，タ形では完了をあらわし，「聞いた」認識時点以前に彼女がヴァイオリンを弾いていなければならなく，同一性はないのである。次は「ヲ知った」文である。

(18-1)　彼女がヴァイオリンを弾くのを知った。
(18-2)　彼女がヴァイオリンを弾いたのを知った。

この「ヲ知る」述語文は（17）に見た「ト聞く」と同じことが言え，ル形では事態が未完了で，「知った」時よりも未来にヴァイオリンを弾くことを意図しているが，一方，タ形は完了をあらわし，「知った」認識時点以前に彼女がヴァイオリンを弾いていなければならない。次は「ヲ喜ぶ」である。

5　橋本（1990）では，補文標識「ノ」と「コト」を取り上げ，「ノ」の成立条件として補文と主文の動詞に何らかの同時性，同一場面性といった〈密接性〉があると述べている。また，三原（1992：11）でも時制の観点から主節（MC）と従属節（SC）の時制の関係を4つに分類している。

a．SC＜MC　主節事態が従属節事態に後続して起こる。
b．SC＝MC　主節事態と従属節事態が同時に起こる。
c．SC≦MC　主節事態が従属節事態と時間軸の一点を共有し後続する。
d．MC＜SC　主節事態が従属節事態に先行して起こる。

本稿では「b．SC＝MC」と同じく，補文内容と主節動詞の表す事態が同一に起こることを同一性とする。

6　同様の指摘がバーワイズ/ペリー（1992：197）にあるが，本研究の言い方をすれば，次の図で示すことができる。

事態　　：「彼女がヴァイオリンを弾く」こと
‖
認識の態度：「彼女がヴァイオリンを弾く」事態を「僕」が見ている
↓
発話の態度：「彼女がヴァイオリンを弾く」事態を「僕」が認識したとおりに発話する

ここで注目したいのは，事態が認識の状況と同一性にあり，認識の態度をそのまま発話しており，「‖」は同一性を示している。

(20-1)　彼女がヴァイオリンを弾くのを喜んだ。
(20-2)　彼女がヴァイオリンを弾いたのを喜んだ。

この例では「彼女がヴァイオリンを弾く」というル形でも，「彼女がヴァイオリンを弾いた」のタ形でも同一性の解釈が可能だが，ル形では事態が未完了でも構わなく，タ形では事態が既に成立した後に「喜んだ」と認識することも可能なことから，同一性でも構わないが，必要条件ではないと判断できる。

以上の観察から事態と認識の関係について，表1のようにまとめられる。表内の「+」は，積極性が認められ，同一性の解釈ができる場合を示し，「−」は認められない場合を示している。

表1　事態と認識の関係

	ヲ見る	ト聞く	ヲ知る	ト思う	ヲ喜ぶ
事態への積極性	+	−	−	+	−
同一性	+	−	−	−	必須ではない

表1では，「ト聞く」と「ヲ知る」に違いはないが，「ト聞く」は情意表出型，演述型の両者をとりこめるのに対し，「ヲ知る」は演述型のみである。また，「ヲ見る」「ト思う」「ヲ喜ぶ」には認識の態度に違いがあると言える。

4−2　認識と発話の態度

認識と発話の関係を見るが，既に（15）で「ヲ知らなかった」述語文を例として否定文を見たように，否定文では『認識の態度』で『事態』の情報を持ち合わせていなくても，発話時に事態を把握していることが特徴であった。ここでは否定化を分析手段として，認識と発話の態度について述べる。再度「ヲ知る」を観察する。

(18-1)　彼女がヴァイオリンを弾くのを知った。
(18-4)　彼女がヴァイオリンを弾くのを知らなかった。

肯定と否定を較べると，(18-4) の否定文では「彼女がヴァイオリンを弾く」事態を認識時には「知らなかった」のだが，発話時には事態の情報を把握して

おり，認識の態度と発話の態度に異なりがあるが，(18-1) の肯定文では認識の態度がそのまま発話されている。このように「ヲ知った」と「ヲ知らなかった」の肯定文と否定文で情報把握に違いがあるが，他の動詞はどうであろうか。初めは「ヲ見る」である。

(16-1)　彼女がヴァイオリンを弾くのを見た。
(16-4)　彼女がヴァイオリンを弾くのを見なかった。

「ヲ見た」では認識時に「彼女がヴァイオリンを弾いた」ことを経験している。並行して「見なかった」では一貫して事態に対しての情報的接触がなく対象として経験していない[7]。次に「ト聞く」である。

(17-1)　彼女がヴァイオリンを弾くと聞いた。
(17-4)　彼女がヴァイオリンを弾くと聞かなかった。

「ト聞く」は「ヲ見る」のメカニズムと異なり，認識の態度を真偽判断できることが特徴である。つまり認識時以上の事態についての情報把握があり，その証拠として，発話時に異なる2種のコメントが続けらることから証明したい。

(17-1')　彼女がヴァイオリンを弾くと聞いたけど，
　　弾かなかったのでがっかりした/予想通りだった。
(17-4')　彼女がヴァイオリンを弾くと聞かなかったけど，
　　弾いたので驚いた/やはり弾かなかった。

(17-1') で「予想通りだった」(17-4')「やはり弾かなかった」と文が続く場合には，発話の態度において，認識の態度を真としているが，「弾かなかったのでがっかりだ」「弾いたので驚いた」では認識の態度を偽とした発話の態度

7　ここでいう経験とは，Dic (1989) の立てる範疇と同じで，経験性とは“animate being perceives, feels, wants, conceives, or otherwise experiences something.”と述べて，know 述語文には経験性はない［－exp］とするが，belive 述語文では経験性を認めている［＋exp］。
　(a)　John didn't know the story.　［－exp］
　(b)　John didn't believe the story.　［＋exp］

となっている。このことは，これらの文の発話時に，事態について新たな情報を持っている可能性を示しており，発話時に認識の態度を真偽判断できるのがこの動詞の特徴である。次の「ト思う/思わなかった」はどうだろうか。

(19-1)　彼女がヴァイオリンを弾くと思った。
(19-4)　彼女がヴァイオリンを弾くと思わなかった。

「ト思う」も「ト聞く」と同じコンテクストが考えられ，「ト聞く」と同様に認識した後に，発話時に新たな情報を持っていることが予想できる。

(19-1')　彼女がヴァイオリンを弾くと思ったけど，
　　弾かなかったのでがっかりした/予想通りだった。
(19-4')　彼女がヴァイオリンを弾くと思わなかったけど，
　　弾いたので驚いた/予想通りだった。

(19-1') と (19-4') でも「予想通りだ」と文が続く場合には，認識の態度を真としているが，「弾かなかったのでがっかりだ」「弾いたので驚いた」では認識の態度を偽としたものである。このように「ト思う/思わなかった」でも発話時に新たな情報を得た可能性があると言える。最後に「ヲ喜んだ」の分析を行う。

(20-1)　彼女がヴァイオリンを弾くのを喜んだ。
(20-4)　彼女がヴァイオリンを弾くのを喜ばなかった。

「ヲ喜んだ」では肯定も否定も発話時に変化はなく，「彼女がヴァイオリンを弾く」事態に関しては認識の態度でも真として伝えている。以上の観察をまとめたものが，表2である。「＋」は補文の表す事態に関し新たな情報を得る場合で，「－」は得ない場合を示している。

表2　認識と発話の態度の関係

	ヲ見る	ト聞く	ヲ知る	ト思う	ヲ喜ぶ
認識以後，事態について新たな情報を得るかどうか	−	+	±	+	−
		認識の態度を真偽判断できる	常に「知った」ことを含意する	認識の態度を真偽判断できる	

認識から発話に移行する際に，新たな情報を持つものとして，「ヲ知らなかった」，「ト聞く/聞かなかった」と「ト思った/思わなかった」がある。これらについて肯定と否定の関係から述べれば，「知らなかった」と述べる発話の態度は常に「知った」と述べる発話を含意するが，「ト聞く/聞かなかった」と「ト思った/思わなかった」は認識の態度を真あるいは偽と判断している。一方，「ヲ見た/見なかった」「ヲ喜ぶ/喜ばなかった」は認識以後事態について新たに真偽判断を行うことはない。

5　分類の結果

事態と認識の態度，認識と発話の態度の関係を見た結果，5つの動詞の文がそれぞれ異なる構造を持つことを見た。こうした分析結果がどのような意味をもっているのかを要約し，共起する補文標識や助詞に注目しながら，同じタイプの動詞を記したい。

初めに「ヲ見た」の特徴は，事態と認識時に同一性がなければならず，能動的に事態を認識した結果を，真偽判断加えることなく発話するものである。また，この述語は事態に情意表出型の内容を持つことができない。この範疇には「ヲ聞く」「ヲさわる」「ヲ感じる」，そして「ヲ見る」の複合動詞「ヲ見上げる」「ヲ見つめる」等がある。

(21)　「そうなの，その痣が消えるまでは，できないわ」と答えるのを聞くと，その言葉を弁解めいて感じてしまう。

吉行淳之介『砂の上の植物学』：133

(21) では事態「「そうなの，その痣が消えるまでは，できないわ」と答える」ことと認識に同一性があり，その認識を発話時にもそのまま表現したものであ

る。このグループではすべての述語が補文標識「ノ」と共起する。

次に「ト聞く」の特徴は，事態を非能動的に認識して受け入れるが，発話時には新たな情報が含まれ得るものであった。この発話の態度は言い換えれば，事態を引用するもので，発話時に必ずしも認識の態度を真としてしていなくてもかまわない特徴がある。このグループには，他に「ト言う」「ト伝える」「トしている」などがあり，いずれも助詞「ト」と共起している。

(22)　それは彼が女遊びをしていることくらいは，私でも知っておりました。でもまさかそういう特定の人がいるなんて。しかもその女性はおなかにエイスケさんの子を身籠っているといいます。

吉行あぐり『梅桃が実るとき』：97

(22) は，「エイスケさんの子を身籠っている」という情報を得た後，発話時にそれについて真偽判断が可能で，この文に続いて，「結果的には知らないで良かった」と述べているのだが，これは認識の態度を真とした場合である。

次に，「ヲ知る」は認識の態度までは前グループと同じである。しかし，発話時に新たな情報を得て，「知らなかった」と発話する態度は，「知った」と発話する態度を含意している。このように主文の動詞が肯定と否定で態度に違いがあるが，いずれも発話時に事態を把握したものである。このグループに属するものには，基本的に「知る」の意味を持っているもので[8]，「ヲ忘れる」「ヲ覚えている」「ヲ思い出す」などが挙げられる。

(23)　「とにかく私がその二十六個の意識の映像化に成功したことは誰も知らなかった。私も誰にも教えなかった。私はその研究を『組織』とは関係のないところで進めたかったわけです。」

村上春樹　『ハードボイルド・ワンダーランド』：953

(23) では「誰も」が認識の態度では「その二十六個の意識の映像化に成功し

8　太田（1980：116）では know を基本義として構成される動詞について意味分類を行っている。要約すると，know「知る」以外に cease to know の意味を持つ「忘れる」や，continue to know の意味を持つ「おぼえている」，come to know again の意味をもつ「思い出す」に分類できるとしている。

た」という情報を持っていなかったが，この発話時には「誰も」が情報を持っていないことが否定され，「知っている」ことが読みとれる。この範疇の動詞は補文標識「コト」と共起しているが，「ノ」でも構わなく，また（23'）のように「ト」に置き換えることもできる。

（23'）　私がその二十六個の意識の映像化に成功したとは誰も知らなかった。

次に，「ト思う」は「ト聞く」のグループと同じく認識から発話にいたる際，真偽判断が加わる。このグループには「ト信じる」「ト確信する」「ト考える」「ト見る」などがあり，（24）では，この文に続いて「宇宙が永遠の過去から未来へ変わることなく続くものだ」ということを発話者である作者は偽としている。

（24）　人間は長い時間，宇宙が永遠の過去から未来へ変わることなく続くものだと信じてきた。

濱野恵一『脳とテレパシー』：25

形態に関しても「信じる」述語文は，助詞「ト」のみならず，補文標識「コト」とも共起可能である。

（24'）　宇宙が永遠の過去から未来へ変わることなく続くことを信じてきた。

最後に「ヲ喜ぶ」は事態を前提として認識し，そのまま発話するものである。事態から認識の態度まで変わらない点は「ヲ見る」のグループと同じだが，認識の方法が異なり，直接知覚は事態と認識に同一性がなければならないのに対し，「ヲ喜ぶ」は必須ではなく，事態に対し積極的に働きかけるものではない。これは Kiparsky and Kiparsky (1971 : 145) の主張以来，ある意味特性を持ったグループの動詞は，肯定文でも否定文でもその補文を真と前提とする述語に含まれると考えられ，こうした機能を持ったものが感情である。このグループには「ニ驚く」「ヲ後悔する」「ヲ心配する」などがある。

（25）　尾道へ着いたのが夜。（中略）障子の中には，無作法なはだかで，チエホフをぶらさげている女が立っている。尾道へ戻った事を後悔する。

林芙美子『放浪記』：871

(25) では「尾道へ戻った事を後悔する」という文に先立ち，「尾道へ着いたのが夜」と既に述べられているため，聞き手に「尾道へ戻った」ことが意識されている。このグループは補文標識「コト」が必須である。以上の観察をまとめたものが表3である。

表3　態度動詞のグループとその例

精神活動の種類	態度の特徴	例
直接知覚	事態を認識したとおりに発話する	ヲ見る　ヲ見上げる　ヲ見つめる ヲ発見する　ヲ聞く　ヲ感じる ヲさわる　ニ触れる　ガ写る
間接知覚	事態を引用した認識の態度を発話時に真偽判断できる	ト聞く　トいう ト指摘する ト説明する　ト伝える　ト報告する
認知	発話の態度で事態の情報把握を行っている	ヲ知る　ヲ思い出す　ヲ忘れる ヲ確認する　ヲ覚えている ニ気がつく　ガわかる
思考	発話の態度で認識の態度について真偽判断ができる	ト思う　ト意識する　ト疑う　ト信じる ト覚悟する　ト確信する　ト期待する ト推定する　ト判断する　ト見る
感情	認識・発話の態度で事態を前提とする	ヲ喜ぶ　ヲ後悔する　ヲ悲しむ　ヲ感謝する　ヲ惜しむ　ヲ賛成する　ヲ心配する　ニ驚く　ニ驚嘆する　ニあきれる ニあせる

動詞と結びつく助詞や補文標識には，表3以外のものも含まれると思うが，次節でその点は述べたいと思う。以上，事態・認識の態度・発話の態度という3つのレベルを設定し，意志形化および否定化のテストを行うことで，態度動詞の体系を示した。

6　助詞・補文標識の問題

態度動詞の用法を考える際に，動詞のみならず，結びつく助詞や補文標識との結びつきも重要な要因であり，本章では次の2点について述べたい。

Ⅰ　態度動詞の用法と必ず結びつかなければならないものの指摘
Ⅱ　助詞が変わることで態度動詞の用法が変わることの指摘

前節までの分類と助詞・補文標識の関わりについて，分析の結果を表4に表した。○は共起することを，×は共起しないことを示している。

表4　態度動詞と共起する補文標識と助詞

	補文標識		助詞
	ノ	コト	ト
直接知覚	○	×	×
間接知覚	×	×	○
認知	○	○	○
思考	×	○	○
感情	○	○	×

この表からⅠについて述べると，直接知覚・間接知覚は補文標識や助詞と一対一の対応の形態が決まっていることがわかる。このことを補文標識の観点から述べれば，橋本（1990）の指摘どおり，補文標識「ノ」の〈密着性〉が直接認識の特徴として同時性を満たすために不可欠だと言える。また，助詞についても，間接知覚には「ト」と結びつかなければならないことは，藤田（1991）で引用と助詞「ト」の関係が指摘されているとおりである。しかし，それ以外では動詞によって補文標識や助詞の形態が異なったり，反対に一つの動詞でも複数の共起パターンがあるものもある。以下の3例はいずれも認知に属する「思い出す」の実例だが，（26）では補文標識「ノ」，（27）では補文標識「コト」が，そして（28）では助詞「ト」と結びついている。

（26）　その荒れ果てたヴェランダから夕暮れの眺めがいかにも美しかったのを思い出して，夕食後，ともかくもそのヴィラまで登って行ってみるこ

とにした。

堀辰雄『暗い道』：134

(27) なんとか芸者を帰す工夫はないかと考えるうちに，電報為替の来ていたことを思い出したので郵便局の時間にかこつけて，芸者といっしょに部屋を出た。

川端康成『雪国』：42

(28) この時間ともなると，残暑の候とは言え，高原を渡ってくるそよ風が頬にやや冷たく，盆踊りの頃の信州がこんなだった，と思い出された。

藤原正彦『若き数学者のアメリカ』：324

この3文は補文標識や助詞が変わってもいずれも認知を表したものである[9]。同様に思考を表す「信じる」にも2種類の形態が見られ，(29) では補文標識「コト」と，(30) では助詞「ト」と共起している。

(29) モオツァルトは，この男が冥土の使者である事を堅く信じて，早速作曲にとりかかった。

小林秀雄『モーツァルト』：123

(30) なぜなら宇宙とは，全時間・全空間なのだ。人間は長い時間，宇宙が永遠の過去から未来へ変わることなく続くものだと信じてきた。

濱野恵一『脳とテレパシー』：25

また，感情でも補文標識「ノ」「コト」と共起する。(31) (32) は「悲しむ」述語文で，(31) では補文標識「ノ」と，(32) では「コト」とそれぞれ結びついている。

(31) おとなびた恋人たちなら，ぬかりなく機会を作るだろうが，少年も少女もまだ分別も幼く，力はなかった。ただ双方からひそかに，恋しく思

9 阿部 (1997) にも「ト知る」「コトを知る」は意味に大差がないと述べた箇所がある。

い，仲を裂かれたのを悲しむばかりであった。

田辺聖子『新源氏物語』：1220

(32)　下々の僧にいたるまで，宮のお崩れになったことを悲しみ，惜しんだ。

田辺聖子『新源氏物語』：1059

以上の例からも，認知，思考，感情に関しては補文標識や助詞との共起パターンに複数あることがわかる。

次に，Ⅱの助詞が変わることで態度動詞の用法が変わるものだが，感情を表す動詞は助詞「ト」と結びつけば間接知覚の用法となる。

(33)　舟が軋み，底に何かがぶつかったような感じがした時，もう，トモギに戻ったのかと驚いたほどでした。

遠藤周作『沈黙』：118

(33) の例では事態が「もう，トモギに戻ったのか」と疑問化されている上に助詞「の」の付いた形態をしている。助詞「の」は話し手にのみ知識がある披瀝性（田野村1990）という機能を持っていることからも，補文内容が前提化されていないと考えられ，感情の態度動詞の用法とは異なる。助詞「ト」は，「～トはそれだけで述語と結びつき，副詞句を形成する」(藤田1991：119)ように，さまざまな動詞と結びつくことが可能なため，「ト」と共起すると間接知覚の用法になる場合が多い。しかし，「見る」については間接知覚の態度もあり得るが，「ト」と結びついた場合に思考の機能を持つ。

(34)　それらの詩のほとんどは，詩集『北国』に収められているが，これらの詩によって井上靖の文学の基礎は定められたと見ていいであろう。

井上靖『あすなろ物語』解説：375

(34) の「井上靖の文学の基礎は定められた」と「見る」に同一性は見られないことからも，直接知覚ではなく，思考を表す態度動詞である。

以上の観察から，動詞によっては態度動詞としての用法が自動的に決定されているものもあれば，助詞「ト」が間接知覚と非常に結びつきやすいように，特定の共起成分が態度に強い影響を与えるものもある。

7　まとめと今後の課題

本研究では態度動詞というカテゴリーをたて，情報所有と真偽判断の観点から分析を加えた。事態・認識の態度・発話の態度という3つのレベルを設定することで，知覚・認知・思考・感情等の人間の精神活動がどのような過程を経て，言語化されるかを示した。なお，今回の分析では補文標識「ノ」と「コト」と態度動詞の関係は十分に解決できていないが，それらは今後の課題としたい。

本研究は第10回日本語文法談話会（1997年12月14日於学習院女子大学）で発表した内容に，加筆修正したものである。

【参考文献】

阿部二郎（1997）『文の名詞句と引用句「文＋こと」と「文＋と」の異同』
筑波大学博士課程文芸・言語研究科　修士論文
太田　朗（1980）『否定の意味』大修館書店
久野　暲（1973）『日本文法研究』大修館書店
サール J.R.(1986)『言語行為—言語哲学への試論』坂本百大・土屋俊訳　勁草書房
砂川有里子（1988）「引用文における場の二重性について」『日本語学』Vol. 7
明治書院
田野村忠温（1990）『現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』和泉選書
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版．139-154
中右　実（1994）『認知意味論の原理』大修館書店．51
仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』明治書院．188-192
パーマー，F.R.(1972)『英語動詞の言語学的研究』安藤貞雄訳　大修館書店
バーワイズ，ジョン・ペリー，ジョン（1992）『状況と態度』
邦訳　土屋俊　鈴木浩之　白井英俊　片桐恭弘　向井国和　産業図書
橋本　修（1990）「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」
『国語学』163集
藤田保幸（1991）「「引用」の解体——「引用されたコトバ」の表現と「～ト」副詞句の表現，その諸相——」『愛知教育大学研究報告』40（人文科学編）
堀川智也（1991）「心理動詞のアスペクト」『言語文化部紀要21』北海道大学
益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版．154
（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
（1997）『複文』くろしお出版．11
三原健一（1992）『時制解釈と統語現象』くろしお出版
森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』　明治書院
（1989）「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』

仁田義雄　益岡隆志編　くろしお出版
(1992)「文末思考動詞「思う」をめぐって」『日本語学』　Vol. 11
明治書院

Dik, Simon C. (1989) *The Theory of Functional Grammar* Foris Publication, Dordrecht, 89–100

Hirose, Yukio (1986) *Referential Opacity and the speaker's propositional atiitudes* Liber Press

Kiparsky, Paul and Kiparsky, Carol (1971) "Fact" ed. Eteinberg & Jakobovites Semantics Cambridge

Kuroda S. –Y (1973) "Where epistemology, style, and grammar meet: a case study from Japanese." A Festschrift for Morris Halle. Holt, Rinehart and Winston

Kusanagi, Yutaka (1971) The Hypothetico–Deductive Approach in Grammar: A consideration of Basic Methodological Principles and some Formalism Applicable to Clause Structures with a Detailed Practical Illustration. Georgetown University

Yokomizo, Shinichiro (1998) Believing, Wanting, and Feeling: Three Representaional Modes of Embedded Propositional Contents
『世界の日本語教育8』国際交流基金